

3 我が食の歴史

小学時代、足の矯正手術のため4年間入院していた病院の夕食時間には午後4時半。中学から大学時代まで過ごした身障児施設では午後5時半だった。夕食から就寝までの時間が長く、空腹に耐えかね、園庭の桜の葉を口にした事もあった。その後、7時半に夜食としておにぎりが出るようになった。

高校、大学は施設でただ一人、別の学校に通っていたため夕食時間に間に合わず、帰宅後、60席ほどある食堂の片隅で一人、4時間程前に作られたものを食べていた。あの頃は「レンジでチン」の発想は私にはなかった。それでも、ご飯をどんぶり茶碗で3杯は普通だった。

22歳の時、施設を出て大阪市平野区で一人暮らしを始めた。手の障

害のため自炊ができないため、ほとんど外食だった。

当時、人生の希望を宗教に見出した私は会社から帰宅後食事を取らずに、その活動場所に向かった。活動終了後、食事を求めて平野区喜連の地で三輪車を走らせた。給料日前一週間になると、ツケがきく食堂に毎日通った。

時代が平成に変わった頃、近所に「ほか弁屋」が目立ち始め、大いに助かった。

28歳で結婚。妻は会社が繁忙期になると、よく最終電車で帰宅した。最終電車を過ぎると会社支給のタクシー券を利用していった。それから二人の晩ご飯だ。それでも妻は料理を作ってくれた。妻が疲れて料理できない時は外食となった。当時の

喜連の街は、明け方近くまで多くの居酒屋、レストランが開いていた。現在は二人の年金で生活。50歳を過ぎた私は、外飲みの欲求は以前ほど大きくない。夕方になると、妻に言う。

「今夜は『居酒屋ゴンタ』でお願いします」

妻は、酒の進む料理を2、3皿、食卓に並べてくれる。妻は言う。

「お父さんがあちこちに食べに連れて行ってくれたお陰で、料理のレパートリーが増えたよ」

ありがたい妻である。妻のおかげで波乱万丈の人生が、やすらぎの人生へと変わっていく。

